
東方邦人記 【授けられし姓】

姫宮美音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方邦人記 【授けられし姓】

【Nコード】

N3973BA

【作者名】

姫宮美音

【あらすじ】

茨木華扇の日常は変化した。幻想郷の創世者でもある大賢者・八雲紫に連れ去られた一人の人間の登場によって。八雲紫との対談後、その人間を弟子として迎える事と鍛練をさせ、未知数の力を開花させることが決まった。そして数年が経った。

……予想以上にシリアス部分が少ないような気がします。

序章【茨木華扇 side】（前書き）

みなさん初めまして。

姫宮美音と申します。

本来なら初作品を初投稿にと思っていましたが、何の気の迷いがあったのか第二作目を初投稿となってしまうました（汗）

……無駄話はさておき、拙い事だらけですが、優しく見守ってくださいと助かります。

序章【茨木華扇 side】

茨木華扇の prologue

出会いの陰に別れがあるのが必然ならば、唐突に普段の生活に終止符を打たれるのもまた、必然であるのが自明の理なのかもしれない。この世界においては。

妖怪の山のとある一角に茨華仙の屋敷がある。

主の茨木華扇は、他の者から仙人と呼ばれている。

自分でも自覚している部分はあるが、それでも表では行者と謙遜する部分もあり、修行を欠かせない私はあまり外出することが無く、知名度は博麗神社、守矢神社、人里以外で存知している者は数少ない。

そんな邸宅に一人の男性が現れた。

いや、正確には降ってきたと言った方が的確である。

邸宅の二階にある自室。

私は机に積み重ねられた書物の中から一冊取り出し、いつものように読みふけていた。

……ドサツ。

突然の物音に気が付き、同階にある小さな山でも

作れるほどの書物が置いてある部屋か、

三階の食料庫から食材でも落ちたのかと溜息をもらし、

まずは同階の書物庫に向かおうと

危座から立ち上がろうとした。

…が慮外な出来事にその行動は叶わなかった。

「どこへ行くのかしら？」

私以外、誰もいるわけの無い自室から声が聞こえた。

中途半端な立ち膝の状態で恐る恐る振り向く

と…宙に創られた隙間に腰掛けている

大賢者・八雲 紫と、その下に一人の少年が俯せに倒れていた。

「いえ…物音がしたので。」

「それで、音源を探しに向かおうとしたってことかしら？」

「ええ。」

私は頷き、座り直した。

「大丈夫よ、その音源というのはこの子だから。」

「はあ…そうですか。」

一体何が大丈夫だというものが。

八雲 紫は足元に倒れている少年を遊び道具かのように扇子で突っついている。

…どうしてだろうか、突かれている少年を見ると惨めな気持ちになってしまふのは。

「ところで大賢者であるあなたが私に何の用？」

「つれないわねえ…。私の事は紫でいいわよ。」

彼女とは初対面ではない。

だがらといって長々と会話をしたことがなければ

何度か会ったわけではない。

故に打ち解けず、他人行儀になってしまふのだ。

もっとも、きつかけが有ればの話ではあるが。

「コホン…では紫、用件とそこに突っ伏している少年は何者ですか？」

少年に視線を向ける。

俯せの体勢なため、顔を見ることは出来ない。

他に分かる事といったら服装を見る限り外界から来たということぐらい。

外界の人間が来る理由の大半は私の正面にいる彼女の神隠し故、幻想郷に来てしまうのだ。

それ以外にも理由はあるけれど、それは一握り程度の話。

「そうね…簡単にいうとこの子の衣食住の確保と鍛錬。」

……………「っへ？」

思わず気の抜けた声を洩らしてしまった。

少しばかりか紫は私の驚きの声を聞き、微笑んでいた。

「え…と…どうして？」

「彼は気づいていない…きっと開花していないが故の事だと思っわ、彼自身には未知数の秘めたる力が身体の奥底にあることを。」

あなたの言いたい事ってつまり…。

「開花させる務めを担えってことね。」

紫は頷き、言葉を紡いだ。

「深く考えなくていいわ、師となり親身になって弟子となるこの子に修行をさせ、

指導する…まあ、気長にお願いね。」

言い終わると背を向け隙間に入ろうとしたが、

言葉を発することによってそれを止めた。

「わっ、私がいつ弟子にするっていいましたか!？」

「まあ、言っていないわね。」

紫は何故か妖しげな笑みを浮かべている。

唯でさえ行動や言動が読めないため、より一層不気味である。

「いつも傍に居てくれる人がいたらな!。」

それは誰もが聞いたら棒読みと分かるほどの抑揚の無さ。

そこはあまり気にしなくていいけれど。

最も気になっているのは…。

「どうしてそれをつ！」

予想していなかった…会話に出るとは微塵も思わなかったから。

「ふふっ、どうしてと言われても…どうしてかしらねー。」

それは私が呟く言葉。

山奥に住み、屋敷で修行をしているのが常であるため、中々人に会いに行く

機会が生まれない。

それは仙人でもあり行者でもあるが為の事。

隠そうとしても隠せないものなのね。

私が人恋しいってことを。

そしてしばらくの沈黙が続いた…。

お互い視線がそれぞれの顔に向く。

沈黙に先手を掛け、打ち消したのは私だった。

「分かりました、引き受けましょう。」

言葉を繋げ

「大賢者からではなく、紫からのお願いとして。」

「ありがとね、華扇。」

これが始まりだったんだろうと言い切れる。

そう、この出来事から。

序章【茨木華扇 side】（後書き）

華扇視点で書きました。

一話ごとの文章の長さや定まっていりません。
あまりにも長短がひどいようでしたらご連絡ください。

第一話 【始まりの念げ】（前書き）

第一話と聞いていいものなのか…（困）

第一話 【始まりの怠け】

「……つてください。」

何処からか声が聞こえる。

遠くから囁きが朧ろげに聞こえるが、それは夢の中で俺に語りかけている

というのは分かる。

「…きてください。」

え…来てください？

行きたいのは山々なのだが生憎、姿が見えないのでは打つ手なしなのだが…。

辺りを見回しても何も無い。

あるとしても濃霧だけ。

まあ、夢の中といえど所詮は虚構の世界。

空虚であることに対して深く気に留める事は無いが、
せめて声の主に会わせてもらえるぐらいの情けはくれてもいいんじゃないか？

霧しか見ていないのだから。

「おきてください。」

なに、オキテクダサイって言ったのか？

オキテクダサイ…おきてください…掟くださいか？

逡巡して出た結果なのだから間違いは無いだろう。

それにしても訳が解らん…。

掟…別の言い方だと法律、規則等で表せれるな。

それをくださいって言われても…。

もし、見知った者だったら思いつくことはあるが、容姿をみていないのでは

対処のしようがない…。

もし、師匠である華扇さんに掟をくださいと言われたのなら

…「朝早く起こすのはなるべく控えめにしてください。」だろうか。

……………あれ？

一つの疑問点が浮かぶ。

それは単純に【起きてください】ではないか

という素朴な疑問。

だとすれば説明はつく。

唐突に淀くくださいなど普通は言わないはずだ。

言われた側はまず、混乱するだろう。

よく考えてみれば【おきてください】と言われて【起床】が当然な筈なのに何をやっているんだか。

さらに疑問点が浮かぶ。

淀のくんだりから感受していた揺らめきを。

そう、最初は水面に生じる波紋程度。

次第に大地を揺るがし、天変地異を巻き起こすのではないかという
比喩。

正直、ここまでくれば現世で俺を起こさせようとしている事ぐらい
分かる。

全く何て徒話を長々と語っているんだか…。

思慮が浅いうえに諦視出来ないとは落ちぶれたものだねえ…。

もっとも、夢の中での話ではあるが。

夢中で自嘲している自分がいた。

第一話 【始まりの怠け】（後書き）

主人公の名前は次あたりから。

第二話 【わんごの出来ごと】（前書き）

第二話です。

よろしくお願ひします。

第二話 【ちりとの出会い】

すぐそばから聞こえる女性の声に覚醒する。

「目が覚めましたか？」

華扇さんは覗き込みながら無邪気な笑顔を見せている。

「ああ、それにしても清々しい天気だな。」

俺は上の空で話を聞き、逃げる算段をたてていた。

「そうですねー、本っ当に良い天気です。」

微笑みながらも徐々に目と目の間に眉が寄りつつある。

「さて、言いたいことはそれだけですか？」

まずい、笑みが崩れかけてきているな。

「…ああ。」

まあ、たまには良かろう。

仰向けの姿勢から背中をピンとたてた正座に姿勢を直す。

そういえばしばらくと聞いていなかったな。

師匠の説教とやらを。

華扇さんは深呼吸し、

「聖蓮さんっ！！」

これが長時間ありがたい師匠のお話を我が身の為と足が痺れ感覚が無くなるのに
奮闘しながらもお言葉を聞くという事柄の始まるための第一声である。

とはいっても普段から無理矢理…勧められて正座をしているため、
今となつては熟練していて何の問題も生じない。

いや、正確には問題がひとつに減ったのである。

そう、時間が惜しいということ。

そこは分岐点のない一本道。

いや、正確には長い間は分岐出来ないという事だが。

一人空を見据えていた。

もし、一言でいうならば藍色の空。

そう…黄昏と宵の狭間の定刻でしか眺めることの出来ないとても貴重な空の風景。

相互の接面部分…優劣も高下もなく平等で同等。

決して一方に溶け込むこともなく均衡に混ざり合うことによって生み出される景色。

もし、一言でいうならば濃い青。

藍色＝濃い青色であるのは間違いではないのは確固たる事実である。

子供に「藍色ってどんな色？」と質問されたら「濃い青色のことだよ」と返すのは全くの普通なのだが、どうしても納得がいかない。

藍色というものを他の何かで例えてほしくないという気持ち。

「それって藍色は他の何者でも表現不能であり、何よりも素晴らしき色彩が故に

孤高の存在とでも言いたいのかしら？茨木聖蓮。」

「まさしくそれが言いたかったんだよ、古明地さとり。」

後ろを振り返ると、薄紫の髪にヘアバンドを付け、服やスカート共にフリルの多い身装をしており、胸元にはコードと呼ぶべきか小さなホースと呼ぶべきなのか…複数のそれで繋がれている
読心可能な第三の目があった。

「あら、ご期待に添えることが出来て光荣だわ。」

彼女は微かに微笑んだ。

「いつからいたんですかさとりさん？」

「あなたが空を凝視していた頃からよ。」

最初っからではないか…無然として溜息がこぼれる。

「仕方ないじゃない、全然こちらに気づいてくれないんだもの。」

「それは俺にも非があったけど、だからって心を読むことはないだろ…。」

「あなたの思考って普通の人間と比べると面白いもの。」

常人とは逸脱した考えを持っているからなのか、将又別の理由なのか。

「いちよう褒め言葉として受け取っておくよ。」

「お利口ね。言っておくけど、心を読んだのは私の熱い視線に気が付かなかつた罰でもあるのよ。」

「無理があるだろっ！」

周辺に俺の高く発した声音が響いただろう。

せめて正面から送って欲しかった。

それならば即、感知できるはずだから。

自らの意識が上空へ向かっているからたぶんだが。

「それはそうと、こんな所で何をしているんだ？」

「外の空気を吸いたくなって散歩中。そういうあなたは？」

「俺も似たようなものかな。」

「そっ…：なら同じ意向を持つ者同士、御一緒にどうかしら？」

「もちろん。」

お誂え向きな展開に嬉しい限りである。

「誘ってくれたお礼に空から見渡す限りの風景を楽しむ旅ってのは

どじっ。」

さとりさんが頷き、「いいわ」と返事が聞こえたので用意をする。

主の命に今来たることを願わん

両手を絡め、瞳を閉じ、心の中で唱える。

深く深くその一言をハッキリとした意思で。その様子からは神へ祈りを捧げているようにも見えるだろう。

23

唱えた刹那にバサツと上空から翼をはためかせる音がした。

目を開けると上空からゆっくりと真下に下降し、地に着地するとすかさず空高くへ目掛けて「グワツグワツ」と鳴き声を放った。

「この驚って相変わらず大きいわね。」

彼女は感嘆の声をあげていた。

「まあな。」

それもそのはず、こんな規格外の大きさの…大鵬みたいな鷲なんて他にはいないだろう。

強靱な翼に、鋭利に屈曲した大きな嘴。

こんな鷲に狙われたら恐怖と絶望が募るだろうな。

「それでは姫。」

「ふふつ、ええ。」

薄笑いながらも頷き、彼女は俺にしがみ付く。

それを見計らって地面を蹴って宙へ浮かび、鷲の背中に着地する。

彼女が座るのを確認すると鷲が翼を上下運動し、地から飛び去った。

「鳥の王者を従えるなんて本当に凄いわね、あなたの奴隷術は。」

「使役って言うてくれっ！」

つつこまずにはいられなかった。

・・・本当に俺の扱いが上手いよな。

それは同時に敗北でもあるのだが。

ゴホンと咳払いをして

「では、美しき空と共に地上の目に留まる風景をいかに堪能あれ。」

胡散臭い掛け声を第一歩に空の旅が始まった。

第二話 【ちとりとの出会い】（後書き）

主人公の名前です。

【茨木 聖蓮】「せれん」と読みます。

・・・命蓮と白蓮とは関係ありませんよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3973ba/>

東方邦人記 【授けられし姓】

2012年1月13日02時45分発行